萩原朔太郎記念　水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.26　2004.9

第32回朔太郎忌

「朔太郎と口語自由詩」

近藤 洋太

平成十六年五月九日に開催された第32回朔太郎忌で、詩人で文芸評論家の近藤洋太氏による講演が行われました。以下は、この講演録に加筆していただいたものです。

朔太郎との出会い

ご紹介いただきました近藤洋太です。昨日、前橋に初めて参りました。こちらには、利根川があり、広瀬川があり、それから赤城山などの山々がある。前橋に住んでおられるかたがたにすれば、当たり前のことですね。萩原朔太郎の詩に「利根川のほとり」とか「広瀬川」という詩がありますが、実際に前橋に来て、こちらの山河をながめていますと、今まで読んできた朔太郎の詩がずっと具体性をもって理解できるように思います。

僕は福岡県の久留米市の出身です。久留米は筑後川の中・下流に位置します。町の背後に耳納（みのう）連山という山々が続いています。東京で暮らしていますと、山とか川とかを意識しなくなります。東京には多摩川があり、隅田川があり、荒川があり、神田川があるけれども、普段の生活の中で意識しません。山河のあるうるおいのある生活をいつの間にか忘れてしまっているのですね。地下鉄で会社に行って地下鉄で帰ってくる、そんな生活にいつしか慣れてしまっているのです。

四年前に、『水縄譚其弐』という詩集を出しました。そのときに強く朔太郎を意識いたしました。『水縄譚其弐』は故郷をテーマにする詩集です。朔太郎は故郷というものに対するアンビヴァレンツな感情を抱いていましたが、これは時代が変わっても、形を変えて存在するものなんだと思います。

私は高校時代まで天体観測が大好きで天文部に三年間所属しておりました。天文学者になりたい、せめてアマチュア天文家になりたいと思っていました。文学に関心をもつようになったのは、一言で言えば、理科系が駄目だったからです。高校二年生になると、僕らの時代では「数ⅡB」とか「化学」、「物理」というのが出てくるんですね。これが駄目。ただ、今でも科学的な見方、考え方は好きで、今日はそういうこともちょっと織り交ぜてお話ししたいと思います。

高校二年生、十六歳から十七歳ですね。このころのことをよく憶えています。自分との折り合いが一番つかない時期なんですね。国語の教科書に中原中也の「曇天」という詩がありました。「**旗は　はたはた　はためく　ばかり**、／**空の　奥処（おくど）に　舞ひ入る　如く**。」と、こういう詩なんです。一番最初に意識した詩というのはこの作品です。そのすぐあとから、朔太郎、三好達治、草野心平、立原道造、いろいろな近代詩人が自分の中に一気に押し寄せて入ってきました。朔太郎の場合には、学校の図書館に、当時は新潮社版の五巻本の全集があったんです。その第一巻が詩集でした。その詩集をどこまで読んだか。『月に吠える』からせいぜい『青猫』ぐらいまでじゃなかったかと思うんです。『氷島』のような世界というのは、まだ高校二年生ではおそらく理解できなかった、読んでも理解できなかっただろうと思う。

その時、『月に吠える』が大変気に入りました。角川文庫版でこ

の『月に吠える』があって、その不穏さをしばらく持ち歩いておりました。なかに田中恭吉の挿絵がありますが、自分の不安な感情、持てあましている折り合いがつかないっていう感情とマッチするものだった。そういうふうに記憶しています。

しかしこの時期っていうのはそう長くは続きませんでした。自分も詩のごときものを書き始めたんです。そうするとある程度時間が経った近代詩ではなくて、今現在どういう詩が書かれているかっていうことが非常に気になり始めました。そのころ、一九六八年の初めから、思潮社で『現代詩文庫』のシリーズが刊行されはじめる。いわゆる戦後詩人がずらっと一斉に視界にとびこんできたわけです。僕はその世界のほうに魅了されていって、取りあえず近代詩から離れたんです。

朔太郎との再会

十年近く前、早稲田の古本屋で、高校の時、図書館にあった新潮社の五巻本全集を見つけ、それは安かったので買いました。偶然これは見つけたわけですが、しかし偶然とだけは言えないところがあります。ひとつにはその頃、詩の時評を何年か続けて担当して、自分の詩にも他人の詩にも行きづまりを感じていました。自分の中で、近代詩の

再検討を始めなければいけないんじゃないかなという気持ちがありました。もう一つは、様々な書物のなかから朔太郎を読めという促しの声が聞こえてきました。その一番太い声というのは、後でお話ししますけれども保田與重郎からのものでした。

高校時代から三十年隔てて読んだ朔太郎の詩、これは一言で言うと古びていませんでした。古びていないというのは簡単な言い方ですけれど、しかし一般に詩というのものは十年持たない、四、五年でも駄目。古びるということは、かなりよくあることなんです。古びてないというのは大変なことなんです。それどころか新しい発見があった。さっき高校時代には分からなかっただろうと言いましたけれど『氷島』の世界、漢文を訓読みする世界ですね。この世界にびっくりして、魅了されました。

今日は、朔太郎が生きた時代、彼がどのようにして口語自由詩を獲得したか、またそれから離れていったか、その陰で人間朔太郎にどんなドラマが隠されていたのか、そういうことについてお話ししたいと思います。ただ、朔太郎を再読してから、まだ十年足らずです。現在、筑摩書房版の十五巻本の朔太郎全集が出ていますけれど、これをそれぞれ部分的に集中して読んだのが今度で三度目かな。まだ僕の朔太郎読解というのは発展途上にあります。そういうことを前提にお聞き下さい。

朔太郎の話をする前に、前置きがちょっと長くなるかもしれませんが、近代詩の誕生というところから話を進めていきたいと思います。

「師系」の問題

口語自由詩を獲得するまでに、日本の詩歌というのはどんな変遷をたどってきたのか。現代の詩は、和歌、それから俳句から枝分か

れして進化してきたものだと一応は言えるんです。ただ、進化してきたものが必ずしも優れているとは限らない。現在書かれている詩は現代詩と呼ばれているんですが、本当は私たちが書いているのは、「現代口語詩」といったほうがいいのではないか、ということを高橋睦郎が言っています。今だって短歌・俳句の世界はあるわけです。これは「現代定型詩」というふうに考えてみる。

ただこうは言っても、僕なんかは今の短歌・俳句というものについて若干のこだわりがあるんです。それは結社の問題なんです。最近、俳句に関心を持っていまして、角川の月刊誌「俳句」を読んでいるんです。そこにいろいろ結社誌の紹介があるんですが、「師系」という言い方があることを知りました。この「師系」とはどういうことかというと、例えば自分たちは高浜虚子を先生とする流れの流派である、あるいは加藤楸邨を師とする流れの雑誌であるという意味なんです。「師系」というのはつまり師弟関係がはっきりしているということです。

句集を出すときに、先生の許可がないと出せないという話を聞いたことがあるんです。そんなことはないだろうと思って俳人の人たちに聞くと、彼らは顔を見合わせてそんなことは常識だろうという顔をする。どうもそうらしい。すべてかどうか分かりませんがそういうことがあるらしい。これは現代詩の世界ではあり得ないことです。詩集を出す際に仲間に相談するとか先輩に相談するっていうことはあっても、そういうことはあり得ないんです。現代詩は、いい意味でも悪い意味でも「師系」を持たなかった。「師系」の文学ではなかったのです。

しかし、短歌・俳句はなぜ結社が必要なのか。短歌は五七五七七、俳句は五七五という一行の定型詩ですよね。もちろん詩だって自己批評っていうのは難しい。ただ、短歌・俳句というのは一行であるがゆえに、特別の難しさがある。だからやはり先生という人がいて、その指導というのが必要なのか。それが結社が必要な理由のひとつなのかなと思うようになったんです。たとえば高橋睦郎は詩人ですが、俳句も短歌も作るんです。俳句では先輩の詩人で俳句も作った安東次男から「斧正（ふせい）」を受けた。安東次男は「寒雷」同人で加藤楸邨のお弟子さんである。こういうことをみると、特別自己批評の難しさというのがあるかもしれないと思うようになったのです。

イロニーとしての俳諧

もともと、和歌から俳句が生まれた。五七五七七、三十一文字から俳句が生まれた。このことをちょっと考えてみたいのですけれども、万葉集の時代から和歌というものはあります。だいたい並行して連歌・俳諧の伝統というものがありました。連歌・俳諧というのは一種のしりとり遊びですね。最初の人が五七五をつける。それから次の人が七七をつけるっていうふうに続けていく。これは日本独特の「座の文学」、一人で作るのではなくて共同して制作する。

山本健吉が『俳句とは何か』のなかで「連歌が一つの文学として認められるようになったのは、後鳥羽上皇の時代」であると書いています。上品な連歌を作る

ものを「有心衆」、心がある人。それから「風流」である。「柿本衆」ともいう。「柿本衆」とは、柿本人麻呂にあやかって、「柿本衆」って言ったんですね。俳諧をやる人たちのことはこの反対で「無心衆」「無風流」「栗本衆」。何故「栗本衆」なのかというと「柿」と「栗」の関係で「栗本衆」っていうんだそうです。

連歌はですね、上流社会に普及します。それで俳諧のほうは民間に流行する。和歌は歌うもの、宮中の歌会始なんかが典型的にそうですけれど歌うもの。俳諧というのは、これはもともとそういう短歌的な抒情を否定する、批判する、揶揄する。雅やかな和歌に対する諧謔、パロディ、つまりイロニーですね。イロニーっていうのは、反語というふうに一応訳しますけれども、そういうふうにして俳諧が存在した。これが頂点を極めるのが芭蕉の「蕉風俳諧」なんですね。

ちょっと言っておきますけれども、女性にとってね、パロディとか、つまりイロニー、こういうものはあまり好まれなかった。江戸期は女性俳人が少ないです。なぜかというと、女性一般が今と違ってイロニーを嫌ったということなんだろうと思います。

文語定型詩の成立

俳諧・連句、歌仙は三十六句、百韻では百句ですね。この発句、最初の句が独立して俳句になります。明治期に正岡子規が俳句革新運動を起こします。俳句を独立した文学として確立する、そういう努力をするわけですね。一方で新体詩運動が起こる。

島崎藤村によって新体詩は完成の域に達する。代表的な三つの詩集を挙げてみます。島崎藤村の『若菜集』、これは明治三十年に成立しています。「初恋」という詩は皆さんご存じだと思います。「まだあけ初めし前髪の／林檎のもとに見えしとき／前にさしたる花櫛の／花ある君と思ひけり／／やさしく白き手をのべて／林檎をわれにあたへしは／薄紅の秋の実に／人こひ初めしはじめなり」。これは七五七五七五という音数律が続く。

それから上田敏の『海潮音』、これは明治三十八年に成立しますが、ヴェルレーヌの「落葉」という詩、これもご存じだと思います。「秋の日の／ヴィオロンの／ためいきの／身にしみて／ひたぶるに／うら悲し。／／鐘のおとに／胸ふたぎ／色かへて／涙ぐむ／過ぎし日の／おもひでや。／／げにわれは／うらぶれて／ここかしこ／さだめなく／とび散らふ／落ち葉かな。」。これは全部五音で出来ていますね。

明治三十九年に伊良子清白が『孔雀船』を上梓します。「漂泊」の最初の部分を読んでみます。「蓆戸に／秋風吹いて／河添の旅籠屋さびし／哀れなる旅の男は／夕暮の空を眺めて／いと低く歌ひはじめぬ／／亡母は／処女となりて／白き額月に現はれ／／亡父は／童子となりて／円き肩銀河を渡る」。これは五七五七五七という音数律でできています。

最初の島崎藤村の「初恋」という詩ですが、彼は長野県の馬篭の出身です。九歳のときに上京します。この作品にはモデルがいたと言われていますが、実際の体験というのではおそらくない。彼は西欧的な理念によって理想的な恋愛を描いた。それがこの作品だったのだろうというふうに思います。彼は明治学院に学び、二十歳そこそこで明治学院の教師になる。あるいは東北学院の教師になる。つよく西洋文化の影響を受けるわけですね。

上田敏は東大の英文科を卒業します。『海潮音』というのはイギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどの当時の現代詩人ですね、そういう人の訳詩集を作った。この人は小泉八雲をして、百万人に一人の逸材だと言わしめた語学能力の優れた人だった。それだけでなくて文学的感性の優れた人でした。今申し上げた上田敏にしろ島

崎藤村にしろ、日本の近代詩の始まりというのは西洋の影響が強い。

伊良子清白もまた、医師ということもあってドイツ語を学び、ドイツ語の詩人の翻訳を手がけています。彼はそれまでに書いた二百篇あまりの詩のなかから十八篇を厳選して『孔雀船』にまとめる。『若菜集』から九年目にして非常に完成度の高い文語定型詩を作る。詩に凝縮力がある、物語性があるという作品集を作る。しかし彼は、その後詩を廃絶します。当時、文語定型を守ろうというグループと、一方で若い人たちの、いやそれでは駄目なんだ、もっと新しい詩の形を作らなければいけないんだとするグループの狭間で、詩を廃絶する。彼は各地を転々として僻地の医者になり、漂泊の人生を送ることになるわけですね。

口語自由詩の発生

明治三十年の『若菜集』から、その十年後、明治四十年にすでに口語自由詩が発生しています。この間に文語自由詩の問題があるんですが、これはちょっと今回は省略してお話しします。

なんで口語自由詩が発生してきたか。言文一致、つまり言っていること、口で喋っていることと、書いていることを一致させたい。こういう欲求は明治の初期から小説の世界ではあった。詩の世界でも、こうした欲求が強くなってきます。

最初の口語自由詩というのは川路柳虹の「塵塚」という詩だといわれています。どういう詩かといいますとね。「隣の家の穀倉の裏手に／臭い塵溜が蒸されたにほひ、／塵溜のうちにはこもる／いろ〳〵の芥の臭み、／梅雨晴れの夕をながれ漂つて／空はかつかと爛れてる。／／塵溜の中には動く稲の虫、浮蛾の卵、／また土を食む蚯蚓らが頭を擡げ、／徳利壜の欠片や紙の切れはしが腐れ蒸されて／小さい蚊は喚きながら飛んでゆく。」。先ほど引用しました「漂泊」の詩に比べると明らかに格落ちなんです。ただね、これは仕方のないことでして、今ある現実を見つめたい、そこから詩の言葉を発していこうという欲求は必然的に口語自由詩を求めるんです。しかしその困難は、ひとつには詩の形を変える、七五とか五七の形を変えていく。それから詩の内容を深めたいっていう欲求、詩の内容を変革していこうという試み、このふたつのことを一挙にやろうとしたわけで、一種無謀な試みだったわけですね。

わが国の明治期以降の詩の歴史の特徴は、常に前世代の詩人の詩を否定することで駆け足の前進をしてきた、そういうところがあるんです。このことは、先ほど申し上げた私たちの現代詩が「師系」の文学ではないということと関わるんだと思います。

たとえば戦後の「荒地」の詩人たち、彼らは戦前モダニズム系の詩人たちの影響を受けましたが、先輩詩人たちが思想的に戦争に抗することができなかったことを苦い想いでみていました。戦後の詩の出発にあたっては、戦争の記憶にまつわる日本の伝統詩歌を否定するっていうところからはじめるのです。

魚たちの上陸作戦

これまでの口語自由詩を獲得するまでの話を、突飛なたとえですけど生物の進化で説明するとどうなるか。かつてNHKのサイエンススペシャル「生命　40億年はるかな旅」という番組がありました。そのなかの三回目に「魚たちの上陸作戦」が放送されました。その話と、最近の研究とを参考にお話しします。

地球誕生から四十億年経ったといわれています。現在の研究では四億六千万年前、当時オウムガイが海を支配していました。あれは肉食で獰猛なんですね。そこにはじめて脊椎をもった魚、アランダスピスが生まれました。アランダスピスは弱い魚です。彼らはオウ

ムガイの攻撃に怯えていた。彼らは防御するためにどうしたかというと、海から川に入っていこうとした。海と川っていうのは塩分濃度が違います。ですからこれは大変なことなんだけれども、川には苔とかシダ類とか豊富な栄養源がある。

アランダスピスの子孫は腎臓を発達させる。それで塩分濃度の違いを克服する。また、川の流れは速いですからヒレを発達させる。さらに背骨を発達させる。ヒレから足を発達させる。こういうことをして進化を遂げる。最後の難関は重力なんです。水の中では重力がないですね。ところが地上に上がると重力がどんとかかってくる。陸に上がるためには重力を克服しなければいけない。最初に重力を克服して、陸に上がったのはペデルペスという生物だったといわれています。

これが三億六千万年前、つまり海から陸に上がるまでが一億年かかったことになります。文語自由詩から口語自由詩の道のりは、日本の詩歌の伝統のなかで、最後の重力の壁を破ったペデルペスみたいなものだと僕は思うのです。

今、僕らは当然のように口語自由詩を書きます。けれどもこれを獲得するために先人のさまざまな格闘があった。先ほど申し上げたような川路柳虹の名誉ある失敗作もあったわけですね。そういう流れの中に朔太郎はいたのです。ワニの平べったい姿っていうのはですね、あれは重力を克服した姿ですからね。皆さん、ワニを馬鹿にしてはいけないんです。（笑）

朔太郎の初期詩篇

やっと朔太郎の話になってきました。朔太郎が詩を書き始めたのは明治三十七年、十八歳のときです。三十七年に三篇、三十八年に五篇、それから三年詩作がない。四十二年に一篇、それから三年間ない。詩作については、あまり熱心ではなかったんですね。しかし、大正二年から詩を書くようになります。正確にいうと大正二年の九月から爆発的に詩を書くようになる。

明治三十七年に「君が家」という詩があります。これは後で話しますけれど、エレナという女性にあてた初恋の詩だろうと思います。こういう詩です。「ああ恋人の家なれば／幾度そこを行きぎり／空しくかへるたそがれの／雲つれなきを恨みんや／／水は流れて南する／ゆかしき庭にそそげども／たが放ちたる花中の／艶なる恋もしらでやは」。これは七五七五の文語詩ですね。なにか「水はながれて南する」というふうな言い方が漢文訓読体風です。大正二年に「雨の降る日」っていう詩があります。「雨の降る日の縁端に／わが弟はめんこ打つ／めんこの絵具うす青く／いつもにじめる指のさき／兄も哀しくなりにけり／／雨の降る日のつれづれに／客間の隅でひそひそと／わが妹のひとり言／なにが悲しく羽根ぶとん／力いつぱい抱きしめる／兄も泣きたくなりにけり」。これは感傷的な詩だけれども、よく読むと、なんていうか、自分のものにだんだんしつつあるなという感じがします。同じ七五の文語定型詩ですけれども、自分の体にずっと引きつけているような詩になっている。筑摩書房版の全集の第三巻にその初期詩篇が出ています。それを年代を追って読んでいくと感動的です。うまくなっていき方が感動的に読めるんです。

「ソライロノハナ」の成立

朔太郎は詩よりも早く短歌を作っています。明治三十五年、十六歳の時から短歌を作っております。当初は旧制前橋中学の「坂東太郎」、それから与謝野鉄幹の「明星」。「明星」が終わった後は森鷗外が主宰する「スバル」などに作品を発表します。

鳳晶子、後の与謝野晶子ですね、それから石川啄木。こういう人たちに共感して、その影響を受ける。短歌の発表っていうのは明治三十五年から大正二年まで、十年以上にわたっている。年によって短歌の数にむらがあります。三十六年から三十八年まで多くて、大正二年にまた多くなっている。雑誌に発表しただけで二百六十首ほどあります。大正二年、一九一三年の四月に、自筆歌集で『ソライロノハナ』という一冊しかない本を制作いたします。それまで作っていた一千首あまりの短歌から自選して四百二十三首、重複が二首あるので四百二十一首を載せています。

現代の詩人たちは朔太郎の『ソライロノハナ』をあまり評価しないようにみえる。やはり『月に吠える』の達成の前で『ソライロノハナ』っていうのは陰が薄いっていうのは否めない。僕は今度『ソライロノハナ』をゆっくり読んでみたんですが、これはつまらない歌集ではないですよ。朔太郎は、そのまま歌人になったっておかしくなかったという思いがします。いくつか紹介してみます。

「**行く春の淡き哀しみイソップの蛙の腹の破裂せし音**」。この「蛙の腹の破裂せし音」っていうところがこの歌の手柄なんですね。それから「**夕されば**そぞろ**ありきす銃器屋の前に立ちてはピストルを見る**」。この「ピストル」っていうのは『月に吠える』に出てきますけれども、原型はこれかなって思うのと、この歌だけでも独立してよくできています。それから「**吉原のおはぐろ溝のほのぐらき中にひかれる櫛の片われ**」。あの「櫛の片われ」っていうその観察の細かさが面白い。それからこれはいい歌かどうかは別として「**学校を追はれし我がさかしげに世を罵れば親はまた泣く**」。朔太郎はいくつもの学校を落第しますよね。実感がこもっています。「**あいりすのにほひぶくろの身にしみて忘れかねたる夜のあひびき**」。もう一首「**しののめのまだきに起きて人妻と汽車の窓より見たるひるがほ**」。この二首には人間朔太郎のドラマが隠されていて興味深い。後の「しののめ」の歌は、「夜汽車」という詩に形を変えて出てきます。そのときは「ひるがほ」ではなくて「をだまきの花」になっています。

朔太郎と写真

資料を見ていただけますか。これは十年ほど前に朔太郎の写真作品『ノスタルジア』という本が出まして、そこからコピーしているんです。これは『ソライロノハナ』の序詩「空いろの花」なんです。間違いが二つあるのですが、間違いをあげつらうのではなくて、その間違いが興味深いという意味でそのまま読んでみます。「**たはかれどきの薄らあかりと／空いろの花のわれの想ひを／たれ一人知るひともありやなしや／廃園の石桓にもたれて／われば**かりものを思へば／まだ春あさき草のあはひに／蛇いちごの実の赤く／かくばかり咲き光る哀しさ」。

ちょっと別の話をしますが、柳田國男に『妖怪談義』という本があるんです。そのなかの話です。これ（板書する。「黄昏」）は「たそがれ」と読みますよね。これは「雀色時」ともいうんです。「雀色時」というのは日本人なら誰でも知っている雀の茶色っぽい、薄暗くなっていくあの感じですね。それから「逢魔時」ともいう。「魔」に「逢」うんです。妖怪の出る時間なのです。夕方薄暗くなってくる、それから朝方仄白くなってくる時間。妖怪っていうのは真夜中には出ません。真夜中、丑三つ時に出るのは幽霊です。妖怪っていうのは相手構わず襲うんです。ところが幽霊っていうのは特定の人間に対する怨念を晴らす。妖怪が近代化したものなんです。

違う話になりそうだからちょっと「黄昏」の話に戻りますけれども、何故「たそがれ」というか、知っているかたは黙っていてください（笑）。もとは（板書する。「誰彼」）は「たれそかれ」だっ

たんです。もう一つの言い方は（板書する。「彼誰」）「かはたれ」、つまり同じ意味なんですね。『広辞苑』では、「たそがれどき」は夕暮、「かはたれどき」は朝方と説明されていますが、僕は納得がいかない。意味は同じなんですね。「かはたれ」、「たそがれ」両方共に朝方、夕方をいったんだろうと思うんです。

このもとの詩に戻りますけれども、一行目の「たはかれどき」は「かはたれどき」の間違いでしょう。『ソライロノハナ』の序詩の一番最初に間違えるとは、確信犯的です。それから四行目、これは字の間違いで「廃園の石桓」の「桓」が木偏ではなく土偏ですね。これらは全集ではちゃんと訂されています。

それで詩の上にある写真なんですけれども、ここに写っているのは朔太郎自身なんです。これは誰が撮したかっていう問題があるんだけれども、まあその話は置いておいて、この写真から、詩が作られているっていうのがよく分かるんです。石垣にもたれている朔太郎。その彼の視線の先に「春あさき草のあはひに／蛇いちごの実の赤く」咲いているわけです。僕はちょっと疑ってまして、本当にそういうものを見たのだろうかと思って調べてみたら、「蛇いちごの実」っていうのは、やはり「春あさき」に「実」がつくんですね。かなり正確にこれはやっている。

『ノスタルジア』という作品集の感想で言いますと、朔太郎の写真は詩と不可分の関係にある。寂しい風景が、彼の寂しいところとよくマッチしている、そういう気がしました。だから彼の写真は、アマチュアには違いないけれども単なるアマチュアではない。写真が詩と不可分の関係にあるんだと思います。

エレナという女性

ところで、この一冊だけの自筆歌集『ソライロノハナ』は何のために作られたのか。久保忠夫が、『新潮日本文学アルバム　萩原朔太郎』の中で、洗礼名エレナ、朔太郎の妹ワカの親友で旧姓馬場ナカ、結婚して佐藤ナカとなった女性にあてて作られたと書いています。資料をご覧いただきたいんですが、これは年譜といってもエレナと『ソライロノハナ』についての恋意的な年譜です。大正二年の項、朔太郎が二十七歳のときですね、妹ユキあてで朔太郎に神奈川県七里ヶ浜で転地療養していたナカより居場所を記す葉書が届く。これは妹にあてたものではありますけれども、実際には朔太郎にあてたものだといいます。「家が変りましたから御しらせします。今度の処は部屋の直ぐ下まで波がまゐり升　晴れた日には葉山の燈台が見えます。けれどばあやと二人きりで淋しうございます」という文面です。これが二月です。四月には、朔太郎が「ソライロノハナ」を作る。エレナに献じたかったとしか思えない。五月に『ソライロノハナ』を携えて妹ユキと七里ヶ浜に行ってナカの転地先を探しますけども、見つからなかった。私はエレナという女性は、実は初期の彼の作品、さっき話しました「君が家」もそうだけれども、初期の詩から晩期に到るまで、読みようによってはずっと朔太郎の作品に影を落としている人だというふうに思います。

「ふらんすはあまりに遠し」

明治三十七年、朔太郎は旧制前橋中学を落第します。この年にエレナを知って好意を持つ。ここに大正年間の前橋市の地図があるんですけれど、なんでこの地図を出したかったかというと、こちらの方は朔太郎の生家はご存じでしょう。「竪町（たつまち）通り」、国道十七号線、その際に萩原医院がある。エレナの家は「竪町通り」を隔ててすぐの商店街、今の中央通りのなかにあった。昨日このことを教えていただいたんです。私の歩数で計ってみました。三百七十歩。〇・7

メートルの歩幅として二百六十メートルです。つまり三、四分の距離にある。実はこういうのが、前橋に来て実際にあたってみないと分からないことなんですね。つまり、エレナは朔太郎にとって隣のミヨちゃんだったんです。

エレナは明治四十二年、十九歳で高崎に住む医者の佐藤清と結婚します。朔太郎はこのころ、旧制高校や私立を落第、再入学を繰り返しています。四十四年、朔太郎は外国に行きたいと父親に申し出て駄目だと言われている。「**ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめて新しき背広をきて／きままなる旅にいでてみん。**」（「旅上」）。この詩はね、『純情小曲集』に入っていたものだから、僕は最近までそのころの詩だと思っていたんです。ところがこれは大正二年に書かれている詩なんですね。こなれた詩だからもっと後で書いたのかなと思ったんだけれど、そうではない。なんで「ふらんすへ行きたしと思へども」かというと、やはりエレナのことを忘れたかったからではないのか。佐藤家は医院でしたが、大家族でした。結婚当初、彼女はかいがいしく立ち働いていた。子供が二人できますが、最初の子ができた後で胸を病むんです。明治四十五年、朔太郎は平塚の病院に結核療養中のエレナを見舞っています。

ウェルテルの煩悶

それでもエレナは病状が回復したんでしょう。大正三年には、高崎に戻っている。三年一月二十五日、朔太郎は自分たちの演奏会にエレナを誘うんです。ところがエレナから白紙の返信が来る。朔太郎は日記に「余は既にこのたはむれに飽きたり。危険を冒してまでかかる児戯をつづくる必要何処にありや。恋にあらざる恋、又無益なる芝居を試むる愚をなす忽れ。彼何物ぞ。／これを機会として二度と彼と通信をなすことをやめん。少なくとも彼より求めて来るまでは余は彼を忘れん」。何か未練たらしい言い方ですね。「彼」から言ってくるならいいと。自分からはいわないぞ。ただ、翌日の日記にですね、「S子はたうとう来なかつた。若いハイカラな美男子になれなれしく話しかけられた。あとで聞けば佐藤といふドクトルであつた。私は妙な忌はしい気分に襲はれた」とあります。これは「若きウェルテルの悩み」、そのままですよね。あれはアルベルトとロッテという夫婦の中にウェルテルが入ってきて煩悶する話です。一見物わかりのいい佐藤というドクトルがいるわけです。エレナは少なくとも夫に朔太郎の存在を知らせている。知らせることによって自衛しているのか、そうでないのか、そこがよくわからない。

月食の夜前後

大正三年の五月にエレナは洗礼を受けます。九月四日に朔太郎はエレナと一緒に月食を見たという記録がある。そのときのノートには「もう僕と彼女との間には恋はない。併し恋以上の不可思議な愛がある。それは深く考へるときは戦慄すべきものだ。僕はいそいで別れた。部屋へかへつてからまつさをになつてふるへて居た」。このときの「月蝕皆既」っていう詩があるんです。こういう詩です。

「**みなそこに魚の哀傷、／われに涙のいちじるく、／きみはきみとて、／ましろき乳房をぬらさむとする。／この日ごろつかふことなく、／ひさしくわれら霊智にひたる、／すでに長き祈祷ををへ、／いまみれば月も皆既なり、／魚の性はせんちめんたる、／みよ、うみはみどりをたたへ、／肉青らみ、／いんいんとして二人あひ抱く、／歯と歯と合し、／手は手をつがひ、／もつれつつからまりにつつ、／いんよくきはまり、／魚の浪におよぎて、／よるの海に青き死の光れるをみる。**」。

月食というのは二、三日前にもありました。特に珍しい現象ではないんです。僕は天文部で何度も見ていますけど、実はあれは不気味なものですね。月が欠けるといってもまったく消えるわけではなくて、赤黒く残る。皆既月食になると赤黒い月がずうっと出ている。「いんいんとして二人あひ抱く」という一節はこの感じが出ている。この詩はただごとではない。もう恋愛の詩ではない。これは性愛の詩だというふうに思う。この詩にはボディがある。ただ、このときエレナは懐妊しています。

磯田光一の『萩原朔太郎』という優れた朔太郎論があります。磯田さんは、正常のセックスはなかったかもしれないけれども膣外射精だったらありうると書いているんです。そういうことも考えられ得る情景の詩です。

この月食の一ヶ月前に、朔太郎は「岩魚」という詩を書いています。これと比較してみます。「瀬川ながれを早み、／しんしんと魚らくだる、／ああ岩魚ぞはしる、／谷あひふかに、秋の風光り、／紫苑はなしぼみ、／木末にうれひをかく、／えれなよ、／信仰は空に影さす、／かならずみよ、おんみが静けき額にあり、／よしやここは遠くとも、／わが巡礼は鈴ならしつつ君にいたらむ、／いまうれひは瀧をとどめず、／かなしみ山路をくだり、／せちにせちにおんみをしたひ、／ひさしく手を岩魚のうへにおく。」。これはもう見事な恋愛詩です。この詩と「月蝕皆既」を比較すると、なにか明らかな変化が読みとれる。

大岡信は『萩原朔太郎』の中で、渋谷国忠の説を援用して、もっと以前からエレナと朔太郎はステディな関係にあったといっている。けれども、これは磯田光一によってさりげなく否定されています。エレナの夫との関係はどうだったのか、胸を病んでいたという事実はどうか、それから懐妊していたという事実はどうか。朔太郎の精神状態はどうか。いろいろなことを総合してこの問題は考えてみなければいけないと思っています。

実は今日、萩原朔太郎研究会の野口武久さんにお聞きした話なんですけれど、妹ユキの話では、朔太郎とエレナは相思相愛の関係にあったとあっさりと言ったという話なんですね。

エレナとの破局

大正三年の十一月に事件が起こります。朔太郎は、酔っ払ってエレナの家の前で騒いで、見咎められる。しようがない男です。北原白秋あてに葉書を書いている。「ゆうべあれから大へんなことをしてしまひました。（中略）今朝あたりはエレナの家で大騒ぎをして居るにちがひない（中略）私はハズに本名を知らした、長い間秘密にして居た二人の交歓もこれでおしまひだ」。他ならぬ白秋にです。北原白秋は、明治四十五年七月、姦通罪で告訴されました。わがままでひどいことをする亭主をもつ隣家の女性に同情しているうちに恋愛に発展して、姦通罪で告訴される。いわゆる「桐の花事件」です。その結果、結婚できたんだけれどもうまくいきません。

この「桐の花事件」から学習したのか、エレナの家で騒動が起こったということについてはみんなが不問に付した。それから三年後の大正六年五月、エレナは亡くなります。この日は気分がよく髪を洗おうとして、大量喀血し、人事不省に陥って亡くなる。

このエレナ問題について、こういう事実に振り回されると朔太郎の詩の本質を見失うことにならないかという意見が、たとえばニュークリティシズムの人たちからはあるはずです。しかしそれだけでよい問題ではないようです。エレナ問題については、もっと考えてみてよいと僕は思います。

「かなしい遠景」の多義性

朔太郎のもっとも初期の口語自由詩で書かれた詩のなかに「かなしい遠景」という詩があります。「かなしい薄暮になれば、／労働者にて東京市中が満員になり、／それらの憔悴した帽子のかげが、／市街中いちめんにひろがり、／あつちの市区でも、こつちの市区でも、／堅い地面を掘つくりかへす、／掘り出して見るならば、／煤ぐろい嗅煙草の銀紙だ。／重さ五匁ほどもある、／にほひ菫のひからびきつた根つ株だ。／それも本所深川あたりの遠方からはじめ、／おひおひ市中いつたいにおよぼしてくる。／なやましい薄暮のかげで、／しなびきつた心臓がしやべるを光らしてゐる。」。

高校時代に惹かれた詩というのは、たとえばこんな詩だったんです。今読んでも古びていないっていう意味はですね、この詩に不穏さがありますが、この不穏さが多義的に解釈できる。人間一般の存在の不安とか焦燥みたいなものを書いているようにも見える。あるいはプロレタリア階級の台頭というふうにも読めなくはない。こういういろいろな要素を多義的に持っている。だからいまだに不穏な詩として、僕なんかに訴えてくるものがある。朔太郎の、口語自由詩を獲得しようともがいていたときの、自分の表現にするためのものすごい格闘があったんだろうと僕は思うわけです。

文語詩への回帰の意味

実は『月に吠える』のなかの詩というのは、口語自由詩だけではない。彼は口語自由詩を確立した詩人と言われてはいるんだけれども、口語自由詩ばかりではないんですね。文語体の詩も入っている。『純情小曲集』の「郷土望景詩」、これも文語体。『氷島』もさっきお話ししたように漢文訓読体です。大正三年の終わりに朔太郎は口語自由詩を獲得したといっていいと思う。ところが大正十四、五年ころから一部「郷土望景詩」なんかにすでに文語詩への回帰があるんですね。口語自由詩の時代は、つまり水の中から陸に上がった時代は、せいぜい十年かそこらだったんだということがいえるんです。もちろん彼は、口語自由詩というよりも散文詩というものをいくらも書いているんですけれども、まあ行分け詩ではそういうことが言える。

もう一度たとえ話をします。水の中から最後の難関であった重力の問題を克服したペデルペス。この子孫は、は虫類になり、ほ乳類になり、霊長類になって地上に繁栄したわけですが、ほ乳類の中で、海に帰っていった獣たちもいるんです。「海獣」と一般に言われている。例えばクジラ、イルカは六千万年前に餌がなくなって海に帰っていきます。それからアシカ、アザラシは三千万年前に寒さから逃れるために海に帰っていきます。ラッコ、カワウソは五百万年前に外敵から身を守るために帰っていきます。だけど彼らはもとのペデルペスではないわけです。陸に上がった、口語自由詩を獲得した朔太郎の詩は、人生の苦境にたって海に戻る、文語体に戻ることによって新たな表現の形を獲得したとも言える。朔太郎自身が、それを「退却」とよんでいる。彼はいろいろな言い訳をしているんだけども、僕は実はそのレトリートに興味を持ち、また惹かれるんです。

「国定忠治の墓」のこと

さきほど、高校時代以来、三十年ぶりに朔太郎の詩を読んで『氷島』の世界を発見したといいましたが、なかでも私が好きな詩が「国定忠治の墓」という詩です。昼間、僕は勤めていますから、だいたいものを書いたり、本を読んだりするのは真夜中になるわけです。真夜中に窓を開けてですね、ウォーと叫びたくなるくらい、い

い詩だったですよ。読んでみます。「わがこの村に来りし時／上州の蠶すでに終りて／農家みな冬の閨を閉したり。／太陽は埃に暗く／悽而たる竹藪の影／人生の貧しき惨苦を感ずるなり。／見よ此処に無用の石／路傍の笹の風に吹かれて／無頼の眠りたる墓は立てり。／ああ我れ故郷に低徊して／此所に思へることは寂しきかな。／久遠に輪廻を断絶するも／ああかの荒寥たる平野の中／日月我れを投げうつて去り／意志するものを亡び尽せり。／いかんぞ残生を新たにするも／冬の蕭條たる墓石の下に／汝はその認識をも無用とせむ。」。「国定忠治の墓」自註によれば、これは父密蔵が具合が悪くなって故郷に帰るんですが、ある日、烈風の中、砂礫をついて自転車で国定村に到る。そこで国定忠治の墓を見て、その傍らで詩を書いた。こういう註は、潤色があるかもしれないからどこまで本当かどうか分かりませんが、ともかくそういうことで書いた。この背景には、稲子夫人との離別、家庭の解体という事情がある。『氷島』一巻がそうですけれども、人生の敗残者としての意識が強いですね。朔太郎はこういうふうに言っている。国定忠治というのは代官なんか相手にせずに、幕府に謀反を起こせばよかった、大塩平八郎みたいにやればよかった。だけどそれができない侠客の悲しさがある。そして国定忠治の生涯と自分を重ね合わせることによって自分を表現している。「国定忠治の墓」がどのくらい認識されているのか分からないけれど、非常に好きな詩です。

『氷島』評価

『氷島』については、その評価は人によってまちまちです。三好達治は『氷島』を認めなかった代表格だけれども、彼は朔太郎を先生だと思っていた。同時代に呼吸した人なんですね。だから、彼にとってやはり漢文訓読体に戻る、他ならぬ朔太郎が戻るっていうことは認めがたい何かがあったんだろうと思う。言葉に尽くせない何かそういうものがあったのではないか。しかし三好達治こそ漢文訓読体どころか、漢詩からもよくとっていますし、いろいろな実験をしている人なんです。何かここに謎があると思う。

先ほども磯田光一の『萩原朔太郎』について話ましたが、これは先人の朔太郎研究の上に立って、いろいろなものを吸収して、一番周到に書かれた朔太郎論だと僕は思います。これは雑誌に連載されましたが、最終回を残して亡くなったんですね。未完に終わったんですが、非常にいいものです。

磯田光一は、朔太郎は岩波文庫版の陶淵明とか杜甫の漢詩の本を、背が壊れるほどによく読んでいたことを突き止めています。彼は、明治時代に教育を受けたものにとって漢詩というものは極めて身近なものであった。これまで積み上げてきた近代詩では表現できない、こういうものに出会って、内心の思いを絶叫せざるを得ない心境に到ったときに、朔太郎の血肉を形作ってきた文化が地肌を露出してきたという言い方をしているんです。どうしようもないときに、もう藁をもつかみたいと思ったときに、朔太郎に漢文訓読体の世界が現れてきた。

昨日、前橋文学館で、この岩波文庫を見せていただきました。本当に本の背が壊れるほどによく読んでいました。それが昭和四年の版なんですね。『氷島』が成立するのが昭和九年ですから、彼は昔読んだ陶淵明とか杜甫とかの詩を読み直しているんですよ。その五年間くらいの間にそれを何度もくりかえし読んで、『氷島』の世界を作ったということがよく分かりました。この本が残っていたのは、東京ではなく、前橋に戻った時に読んでいたから残っていたのではないか。東京の家は戦災でやられましたから。彼の血肉を成した文化が、地肌を露出してくるという言い方に僕は説得されます。

朔太郎の言葉感覚

朔太郎のエッセイに「処女の言葉」というのがあります。これは昭和十一年、五十歳になって書かれたものです。若い娘たち、女学生言葉というものに彼は興味を持った。当時、「モチよ」っていう流行語があった。「もちろんよ」っていう意味のことを昭和十年代、「モチよ」って言ったんですね。あるいは「断然行くわ」。今でも使うかもしれませんね。それから「欲しいわ。私。蜜豆」っていう言い方。まあ、これも言わなくはないですけどね。英語の文法の構文みたいです。当時はそういうのがあったと書いています。エゴの強い個人主義風、西洋風のところを朔太郎は肯定しているんです。「生きている言葉」は街を歩く若い女性だけにあると。

今で言うと「アッシーくん」「メッシーくん」「チョベリバ、チョベリグ」「イケメン」「爆睡」とか、だいたいこういう言葉っていうのは女子高校生が発信源の中心になっている。七十年前も今もちっとも変わらないわけですね。朔太郎は「言葉の乱れ」っていうのをネガティブに考えなかった。これを朔太郎の本心と考えてよいか。彼はこのころすでに『氷島』の世界を作っています。僕はこの発言は、やはりある種のイロニーが含まれていたと思う。ただ、世間の人と同じ意見では詩人の沽券にかかわる。したがってこういう言い方になったんだろうと推測します。しかしともかくも、「言葉の乱れ」に付き合おうという意欲が朔太郎にはあったはずだと思います。

朔太郎と保田與重郎

ここで朔太郎と保田與重郎の関わりについて、話をしておきたいと思います。二人の出会いというのは昭和七年、朔太郎が四十六歳、保田與重郎が二十二歳、親子ほどの年齢の開きがあります。朔太郎は昭和十年、「日本浪曼派」が創刊されたときに、とりわけ保田與重郎を強く推挽します。

たとえば、大宅壮一がですね、大宅壮一という人は今の若い人はご存じないかも知れませんね。今で言うと猪瀬直樹みたいな人です。大宅は保田の文章を「お筆先のようなもの」だと言った。「お筆先」というのは大本教の出口なおの神がかりのことですね。大宅壮一はジャーナリストですから、少しでも難解な文章に出会うと「お筆先」のようなものだと言うんです。別のところで読んだのだけれども、小林秀雄についても「お筆先」のようなものだと言っている。朔太郎はこのことについて保田を擁護します。「過去の文壇的邪教と挑戦して、新しき福音を呼ぶための新約なのだ」と擁護するわけです。一方、保田與重郎のほうは、初版『日本の橋』——初版本と改版本とではかなり内容が異なる——に入っている「現代と萩原朔太郎」という文章で、朔太郎の詩を「世間概念でなく世界概念である。一部分でなく全体である。新奇でなく永久である」と絶賛している。この、「現代と萩原朔太郎」は、朔太郎の詩句の一行も引用していない。エッセイも引用していない。若書きで、勢いで書いているから分かりにくいっていうところはあるかもしれない。この文章が書

かれた昭和十一年は、もうすでに朔太郎の詩はほとんど出そろっていた。そういうものをちゃんと見据えたうえでこういうことを言っている。舌足らずのところはあるんだけれども、朔太郎の詩の真芯を突いていると思います。

詩人と戦争

資料をご覧いただきたいんですけれど、朔太郎と興重郎と、相互にどれほどの批評があるか調べたものです。朔太郎の保田についての文章が九篇、保田の朔太郎についての文章が、朔太郎の没後を含めて十四篇あります。私用に作っていますから抜け落ちがあるかもしれません。論考の大小はありますが、ともかく、双方にこれだけの批評があるわけですよ。仲間褒めだけでこれだけの批評は出来ない。僕は戦前において朔太郎について決定的な評価をしたのは保田興重郎だろうと思うんです。戦後の詩人たちは、朔太郎論を書くとき、保田については、これを無視するか、あるいは腰のひけた批判をした。

何故かというと、保田興重郎という人は戦争の遂行に協力した戦争責任者だろう、という言い方をまあするわけですね。保田が戦争の遂行に協力したというのは事実です。しかし戦争という運命共同体の中で、人間はどういう行動をとるのが正しいのか。事実だけを言えば、彼は一兵卒として、戦争末期に満州に追いやられるわけですね。保田は戦争から帰ってきて、そうしたことの言い訳はいっさいしなかった。それに引きかえて、文化人たちの「事後のレジスタンス」は華々しかったのです。

朔太郎という人は軍人の横行を嫌がった人です。戦争を嫌った、むしろ怯えたといってもいいですね。朔太郎の反権力意識は、関東大震災の際に朝鮮人虐殺について書かれた「近日所感」という詩ま

でさかのぼれる。「**朝鮮人あまた殺され／その血百里の間に連なれり／われ怒りて視る、何の惨虐ぞ**」。こういうことを、きちんと書き残している。

今度、萩原朔太郎研究会の「会報」の六十号を送っていただきました。野口武久さんが「辞世の句異聞」という文章を書いておられる。二つあるんですね。「**行列の行きつくはては飢餓地獄**」、「**黒幕の影からいよいよ角を出し**」。これは全集には入っていません。この二句が、晩年のメモの中にあったことを堀辰雄が書いている。これを金子兜太や嵐山光三郎が、これは結構な朔太郎の辞世の句だというふうに言ったというのです。メモの類を辞世の句というのはあんまりだろうと思う。朔太郎にはもっといい俳句が遺稿として残っている。この二句をちゃんとしてないとは言わないですが、無季でもあるし、一応五七五の形にして、何かしようと思ったときのメモでしょう。ただ、このメモからも、彼が戦争に対して少なくとも警戒心をもっていた、反発をもっていた、あるいは絶望感をもっていたということが分かるはずですね。

この戦争に対する保田興重郎と朔太郎のギャップ、朔太郎を論じる詩人たちの多くはそこで腰が引けている。しかし文学として考えれば、この二人は根本のところで矛盾した考え方をもってはいなかったと僕は思うのです。

早すぎた浪曼派

朔太郎は『ソライロノハナ』を作ったけれども、保田興重郎も『木丹木母集』という歌集を作っています。二人とも短歌を作っていたんです。朔太郎は大正年間からアララギ主流の歌壇を清新さがないと批判してきた。昭和十二年に書かれた朔太郎の「自然主義を離脱せよ」では、より具体的にアララギ批判、斎藤茂吉批判を展開

したわけです。もともと朔太郎は「明星」とか「スバル」とか、アララギと反対の立場の雑誌に属して、晶子、啄木などに共鳴していた。朔太郎が「自然主義を離脱せよ」と言えるようになったのは、保田與重郎らの「日本浪曼派」の登場に力を得たことによるだろうと思うんです。後に保田與重郎は『万葉集の精神』という本を書きます。これは徹底したアララギ批判です。彼らのアララギ批判はアララギというエコール批判にとどまらないで、文学の現状批判だったと言えるんです。こういうところで、彼らは共通していた。

もう一つ言うと、朔太郎に「歴史の斜視線」というエッセイがあります。これは献辞が「保田與重郎君に」と付いている。保田の『後鳥羽院』は文学の系譜を、後鳥羽院から評価し直している本なんですが、朔太郎のこのエッセイは、むしろ保田の論旨に影響を受けていると思えるのです。

中野重治が筑摩全集版の月報に書いていることですが、ある日、朔太郎から速達をもらって牛鍋屋か何かそういうところに呼び出された。行ってみたら、一杯飲んでね、そのうち朔太郎は、懐からおもむろに原稿を出して見てくれないかといくらかはにかみながら言ったというんです。朔太郎と中野重治の年齢差は十六歳です。これだけ年齢が違っていても、朔太郎は決して偉ぶるところがなかったと中野重治は書いています。

私が今日申し上げたかった一番のことは、「月に吠える」から「氷島」までの朔太郎の作品を読んでみると、一面では、朔太郎は「早すぎた浪曼派」だと言えるのではないかということです。僕はこれを、これから具体的に、論理的に検証していきたいと思っています。

今日の朔太郎評価

今年の二月号の「現代詩手帖」で、新鋭詩人特集を組んでいます。野村喜和夫が「新鋭詩人への十五の質問」というのをやっています。設問の一つに「もしあなたが現代詩の歴史を書くとしたら、誰あるいは何から始めますか」という問いに十五人が答えていますが、そのうちの四人が朔太郎から始めると言っている。そのほかに西脇順三郎とか、田村隆一とか、吉岡実とかの名前があがっているけれども、やはり朔太郎がダントツなわけですね。彼らがどこまで口語自由詩を確立した詩人と認識しているかは分かりませんが、僕は彼らに期待したい。

僕もいろいろなテーマを抱えて時間が足りない。僕がやりたいことを全部やろうとするとですね、ざっと計算して百五十年生きなきゃいけないことになる。（笑）そんなに生きられないですね。ただ朔太郎については、高校時代の親しみ、三十年を隔てて読んだ時の衝撃、そのことを反芻しながら、この詩人をよく調べて、是非、僕なりの朔太郎論を書きたいというのが念願であります。ご静聴ありがとうございました。

近藤　洋太（こんどう　ようた）

1949年、福岡県久留米市生まれ。
詩集に『水縄譚』、『水縄譚其弐』など、評論集に『〈戦後〉というアポリア』、『保田與重郎の時代』などがある。
現在、「歴程」同人、「江古田文学」会員、日本文芸家協会会員。